

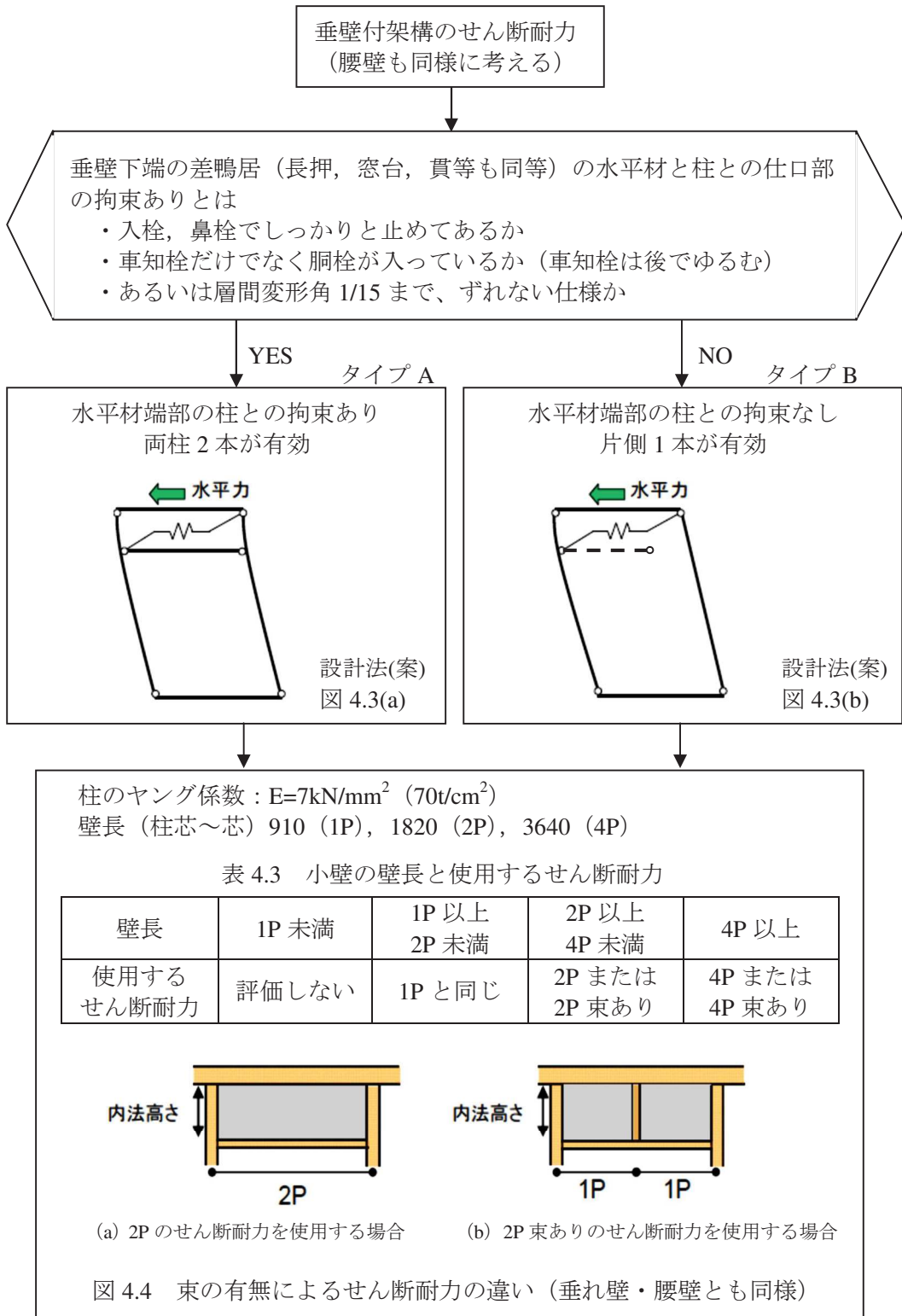
ここでは、各種パラメーター（階高、壁長、壁高さ、壁厚、柱径、束の有無、有効柱本数）等により柱せん断耐力について多くの計算を行い、表にまとめています。耐力は層間変形角  $1/90\text{rad}$  と  $1/20\text{rad}$  について表記しています。

柱のせん断耐力の選定と共に、柱の折損についても検討する必要があります。柱の折損については、「8章. 柱の設計」で説明しています。

小壁付架構のせん断耐力は、架構のせん断耐力のほかに柱の座屈、折損も影響します。設計法（案）を読むだけではわかりづらいので、以下にフローチャートを示します。

フローチャートは、垂壁（腰壁）付きルートと垂れ壁・腰壁付きルートの2種類を作成しています。

a. 小壁（垂壁または腰壁）付架構のせん断耐力（1）



壁高さ（土壁の実高さ） 300～1300  
 壁厚 60～90  
 柱径 120～180  
 スパン内 1P 毎の束の有無

小壁付き（垂壁または腰壁付き）架構のせん断耐力選定

有効柱 2 本

(mm) ※1

有効柱  
1本

[表示ページは設計法(案)のページを示す。この後の本書にも同様の表を添付している]

該当する項を採用する（耐力表は 1 フレームのせん断耐力を示します）

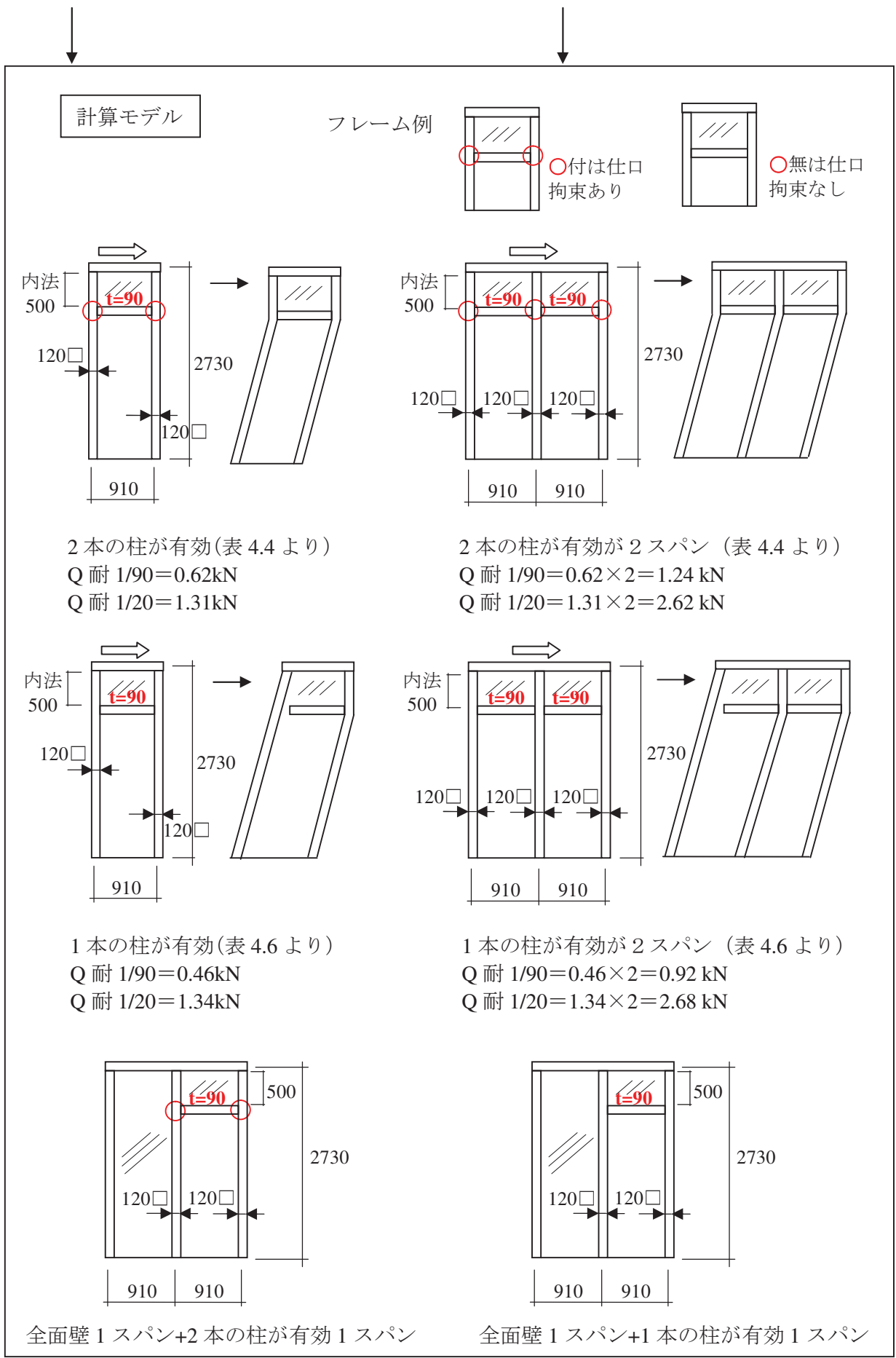
- 1. 階高：H=2730
- 2. 壁長 1P, 2P, 2P（束あり） →表 4.4 にてフレーム耐力選定 P.15
- 3. 壁長 4P, 4P（束あり） →表 4.5 にてフレーム耐力選定 P.17
- 1. 階高：H=2275
- 2. 壁長 1P, 2P, 2P（束あり） →設計資料-2、付表 1 にてフレーム耐力選定 P.89
- 3. 壁長 4P, 4P（束あり） →設計資料-2、付表 2 にてフレーム耐力選定 P.91
- 1. 階高：H=3185
- 2. 壁長 1P, 2P, 2P（束あり） →設計資料-2、付表 5 にてフレーム耐力選定 P.97
- 3. 壁長 4P, 4P（束あり） →設計資料-2、付表 6 にてフレーム耐力選定 P.99

(mm) ※1

[表示ページは設計法(案)のページを示す。この後の本書にも同様の表を添付している]

該当する項を採用する

- 1. 階高：H=2730
- 2. 壁長 1P, 2P, 2P（束あり） →表 4.6 にてフレーム耐力選定 P.19
- 3. 壁長 4P, 4P（束あり） →表 4.7 にてフレーム耐力選定 P.21
- 1. 階高：H=2275
- 2. 壁長 1P, 2P, 2P（束あり） →設計資料-2、付表 3 にてフレーム耐力選定 P.93
- 3. 壁長 4P, 4P（束あり） →設計資料-2、付表 4 にてフレーム耐力選定 P.95
- 1. 階高：H=3185
- 2. 壁長 1P, 2P, 2P（束あり） →設計資料-2、付表 7 にてフレーム耐力選定 P.101
- 3. 壁長 4P, 4P（束あり） →設計資料-2、付表 8 にてフレーム耐力選定 P.103





## 8章 柱の設計より

- i) 柱の座屈なし (8.柱の設計参照)
- ii) 小壁が取付く柱の折損なし (設計資料-5, 付図 1~10)  
有効な柱 2 本が 1 本より明らかに有利  
P.110 \*1
- iii) 通し柱仕口折損なし (設計資料-3, 付表 9~11)  
P.105 \*1
- iv) 隅部柱の足固め下折損なし (設計資料-4, 付表 12~17)  
P.108 \*1

の確認を行う

\*1) ii, iii, ivについて、この4章では図表を用いて、柱の折損の可能性をチェックする方法を簡単に示しています。計算により精算する場合や付表の説明に関しては8章を参照して下さい。



END

\*1) 図表はこの後にも添付します。